

巻頭言

この小冊子は、研究室のメンバー向けにまとめた、2010年度の研究室の記録です。

今年度、神戸大学での一期生3名が、無事修士修了に至りました。卒業生に幸あれと祈ります。

この一年間を振り返ります。私自身は専攻長として、毎月の専攻長会議に加え、新入生ガイダンスから学位授与に至る種々の行事に出席しました。6月には8大学化学系学科長会議を神戸で開催しました。学科・研究科の意思決定や人事に携わりました。薬品点検、放射線点検など研究室巡回を行いました。一般向け、新入生向け、高校生向けの行事で、学科紹介や研究紹介を行いました。恒常的に事務から来る多様な連絡への対応作業が最も煩雑でした。いろんな機会に人前に出る経験は面白くもありました。運営に携わり、組織の仕組みを知りえたこと自体は、得難い経験となりました。雑務と思える事柄も多く、時間を取られたのは確かですが、多くは全体のために必要な仕事であり、前任地での講義・雑務の繁忙さを思えば我慢できるレベルです。

ここで前任地（私立大学）での10年を思い出しました。前任地に比べ、現所属の研究教育環境（学生、設備、研究・教育に割ける時間）は格段に優れ、実感としておよそ10倍です。教育・研究ともに、やりがいがあります。この意味では私は大変な幸せ者です。前任地では、盆と正月に一報ずつしか論文は書けませんでした。5月の連休にもう一報論文が書けた年もあります。ずいぶん私生活も犠牲にしたものです。現在では、誇れるほどではありませんが、少なくとも成果も論文も恒常的に出ています。逆に、ずっと国立大の先生は、恵まれていることを知らないのだろうと、ふと感じることもあります。しかしもっといえるのは、学生も随分と恵まれた環境にいるということです。それを自覚し、向学心と責任感を持つべきであることを、私自身が、初年度生対象の講義でも毎年学生に述べています。

教育については、講義アンケート（授業評価）が全科目について実施されています。普段は結果を見ることはありませんが、先般、全学科目で私が担当している「基礎無機化学」（他学科の一年生向け講義）の回答をふと見てみました。これは院試にも対応できるほど内容の濃い講義ですが、結果は驚くほど好評でした。回答率が低いので全体を反映してはいない恐れはありますが、なかには他学科の学生にもかかわらず、この講義に出て化学をやりたくなった、という声もありました。半期のあいだ講義で接するだけで、おそらく人生で二度と会わない人が大半です。化学科の学生ではないので、私の研究室に来ることもありません。見返りはありませんが、彼らの人生にプラスになることと思えば、労力を割いても満足です。同じ意味のことは、研究室の学生についてはもっと言えます。

（2011年3月 持田）

追記（一年後）

2011年の年度末は、専攻長用務に加え、震災が生じるなどしたため、発刊に至らずそのままになっていました。一年後、改めて「卒業生のメッセージ」を加えて刊行することにしました。本文は2010年度の内容ですが、この部分だけは一年後のものです。すなわち今号は、当該年度の修士修了者に、一年後のメッセージを寄せてもらおうという変わった形になりました。原稿を寄せてくれた卒業生には感謝です。

（2012年4月 持田）